

田植草紙全考注（朝哥の部）

—その二—

真 鍋 昌 弘

4 番

〃 一 おく山のこうさきなにをほうてこれまで
〓 二 はぎやゆたのめやつゆをほうてこれまで
〓 三 こさゝかきわけ露ほとちきりをこめいで
〓 四 ちきりこめたやいとよりほそひちきりを

〔注〕 〓 一 この親歌の類型は

〓 奥山の兎く何にを見てはらむ

十五やの月を見てはらむでんでん（文化十一年書写雨乞揃
哥集。大順屋九）『日本歌謡研究』。四号所収。

にも見えている。類型の範囲をもう少しゆるめてみるならば、
はやく行智篇『童謡集』（文政年間）に見られる

〓 うさぎうさぎ なによ見てはねる…（子守唄のあそばせ唄）
の系統の伝承わらべうたの歌い出しに通ずる。

また柳田国男翁も『民謡の今と昔』（民謡雑記の項）に引用

田植草紙全考注（二）

されている、安芸・山県郡田植歌

〓 兎どの兎どの なぜに耳が長いか うねんで生れて 谷
んで育って うねのさうも聞きたし 谷のさうも聞きた
し それで耳が長いよ われが生れはさんしう山の小兎
（『俚謡集』）

は 同じく行智の前掲書にある

〓 ころく や引まのう引さきは引 な引ぜにお耳がなご御さ
る引（下略）（子守唄の寝させ唄）

をはじめ、佐賀・唐津地方の子守唄

〓 こんこん小山の子兎はなぜにお耳が長うござる（下略）

（坂根敵夫氏他篇『佐賀のわらべうた』所収）

などに見られる歌い出しと同類で、この4番の親歌とも通ず
る。「田植草紙」における「わらべうた」的零曲気を指摘で
きる一声であろう。もちろん「わらべうた」から「田植草紙」
系歌謡へか、又はその逆か、問題である。私は伝承わらべう

植歌) など。

〈2〉 ゆたのめ、不詳。歌謡集成本は「綿のめ」と解して載せる。

「いたらへ」(高松屋古本、横路本、「いたらめ」(植哥、金井坐本、ぞうこくや本、「ゆさらめ」(水川古本、雑紙)、「いさらべ」

(哥写、「与たら平」(大哥双紙) などと伝える。「ゆすらうめ

(梅桃) の約ゆすらめの転訛か」(大系頭注。明治以後、安芸

新庄の雛子田でもゆすら梅のことと思って歌っているとの由。

〈3〉 小笹掻き分け、その葉に置いた露ほど繁く契籠めいどうしようぞの意。「いで」は山内洋一郎氏篇「田植草紙校訂本文」脚註の如く反語的強調に用いられる助詞とするのがよい

かと思われる。

〈4〉 前半「ちぎりこめたよ」(雑紙、大哥双紙、金井坐本) とも。

「絲より細い」の表現は「植哥」にある苗取歌にも

「じつとしめさいいとよりほそいこしがとある。

〔考説〕

前歌の露を受けて「兎」が「露」と結ばれている。露に濡れた朝草刈りの男の足もとを走り過ぎる一匹の兎に思いをはせるといったところであろうか。3番は朝風になびく桔梗の図で、そこに恋に涙する女性がほのめかされたが、本歌ではまず可憐な野の風物を、伝承する兎のわらべうた(十守唄) 的発想でうたい出した。それは一つの歌の型に寄りそう在り方ではあったが、そこにはハレの場の歌にすら関わってくるやはり一種の童心的な心の動きを見てとってもよいであろう。そしてこの親歌と子歌にうたわれた

たが取り入れられたのではないかと思うが、かくの如く「わらべうた」かまたその雰囲気をもつ歌詞が田植歌として取り入れられ、如何なる機能をもち意味をもったかについては後述の49番参照。なお「奥山の(に)……」で始る田植歌やわらべうたはいくつかあるし、歌謡史上諸々みられるが、この発想にはちょうど山を見つめ、見上げる農の人の姿勢が関係しているであろうし、その本来においては、山に対する信仰的意識があったろうことが想像される。

後半の「ほうて」、久保本、歌謡集成本、ともに同じ。但し後者は「ほ」に「おか」と注する。

「なニをおうてこれまで(高松屋古本)

「なにやおうて是迄(雑紙)

「なにおうて是まで(植哥)

など「おうて」が多い。「玖可組田植歌」でも

「奥山の小うさぎハ何を追ふて是まで……

とある。意味上、「追うて」であろうか。東北、兵庫、

鳥取、島根、広島地方では追うことをボウと発音するのは参考になる(東条操氏『全国方言辞典』、広島県方言

辞典) 他に。

「何をかうて是迄(御哥雙紙)

「なにをくうてこれまで(有久本)

「何をねぶりこれ迄(上佐屋本)

「何をたべて是迄(『粒々辛苦・流汗一滴』所収、石見邑智郡田

内容は次のオロシで発展変化する。わらべうた的零屈気が恋歌になる。集団労働の歌謡においては、諸種の素材や発想ではじまるが、それらがやがて恋歌になってゆくということはむしろ一つのきまりであるとも言えるが、この場合も例外ではない。

つまり後半は、3番の「恋風が身に染む」を暗に受け入れて、もう「契りを籠める」までの恋の情緒に発展しているのである。

この小兎から絲より細い契りへの歌の運びは、可憐にしてみごとに調和していると思う。潤いのある美しい流れであった。田中瑩一氏は「小兎を人間にひきつけて見る柔軟な感受性」を見、この歌の特に第二行目については「小兎は決して萩やゆたの芽や露を追うて来たのではない。たまたまふもとの田に迷い出た小兎を、

こういう風狂の使いに見たてるのは高度に詩的な想像力だといふべきだろう」(『田植草紙歌謡の方法』、一その一、『田唄研究』、第八号所収)と述べられているのを引用しておきたい。美的理念とまではゆかないにしても、田人の描く一つの理想的な「絲より細い恋」のスタイルがあり、そういう零屈気のなかで兎が(土俗的な臭いをまだわずかながら発散させながらも(後述))やはり文芸的な意識によって把握されてゆくこうとする動向を見るのである。これは田植祭りの歌謡の一つの発展でありまた屈折でもあったようである。また西堀一三氏は『民謡初期』のなかで、この歌について「細みの心を人間相互の中に生かさうとしてゐるのである」と言い「世の風流ではなく素純な心の中に細みの情があることを考へる」のであると述べられている。この細みの心を「田植草紙」の

どこまでおし広めるかはもう一度考えなおさねばならないとしても、少くともこの4番やその前後の歌にはそういう「絲より細い契りを愛する心」(細みの情)を田人のなかに認めてよいであろう。ただ、「田植草紙」全体をみても京への傾斜・憧憬が各所にうたわれていて都の風流にひたろうとする時代的气氛があるのであって、「世の風流ではなく」と言い切ってしまうかどうか疑問ではある。むしろ田人の心に宿っていた細みの心が時代的な零屈気のなかで刺激を受け、いっそう色どりをましていったという風に考えられよう。一面に時代性も考えて、都風な洗練されたものを求め、それにひたろうとする情趣は忘れられてはならないであろう。

ともかくこの歌で大切なのは、野の兎(自然)と絲より細い恋(心)との詩的な調和した流れであった。細みの情が兎と露の素材を通してゆらゆらと揺れたのがやはり「田植草紙」的なのである。

その「田植草紙」的であるということのもう一つの点もつけ加えておくほうが良いかもしれない。朝歌一番は先に示した如く「しのび歌」であって、男女の情交をうたっている。つまり朝歌一番で「契り」がうたわれるのであって、その流れはこの4番にまでにも余韻をもって流れていると見られる。「田植草紙」全体をみても恋が成就されてゆく用意された構成があったが、このはなやかな儀礼の場ではやはりその「題材」——「契り」を歌うことに繁栄の呪術的意味を感じとっている田人の精神をまったく見す

てるわけにはゆかないであろう。恋の契りと稲のみのりが意識のなかで結ばれてゆくのである。しかしもちろん、そういった原始的なエネルギーな背景がそのままあらわれているのではない。もうこういう「あはれ」になって、底流の意識をほとんど感じさせないぐらい美しい小歌になっているのである。そのあたりの微妙な意識の交叉を考えてみたい。このあたり、あるいは中世的呪歌のおもしろさをのぞかせているとも言えようか。

なお、田人の農の生活に兎が意味をもつて、信仰の世界で重んぜられた事例はある。ここには省略するが、民俗関係の報告書によっても、多産な兎を神として祭る風習が参考になるかもしれない。世界的にはフレイザーが『金枝篇』で述べた穀物霊としての兎の例もある。そういったなかで、安芸・新庄で耳にした農事上の言い伝えの一つに、このあたりでは一月八日には山の神が白兎の背中に乗られて山々をめぐる木々に新芽をおさずけになるというのがあった(『綜合日本民俗語彙』のヤマノカミノシカリの項では、島根・飯石郡地方の例があり、これも旧暦正月二十日は山の神が白兎に乗って猪狩に出ると言うている)。山の神の使としての兎の伝承が田植草紙地帯に聞かれるのである。この伝承はあるいは農の開始を意味しているのかと思われるが、俗信のなかで意味のある奥山の兎を知るのである。奥山から野に里に來た兎は、折り目の農の時期を迎えた人々の信仰上のよろこびとも結びついてた。かつて、この4番に見られる兎をうたうわらべうた的発想の奥には、あるいはその発想類型を受け入れた地盤には、山の神の使としての兎

の俗信があったようである。ただ、前の「契り」の意味のところでも述べた如く、そういったいくつかの条件を奥にかくして、この歌はなんとしても美しい小歌であった。
「玖可組田植歌」では、オロシが続いて、
「野原の露にしよほねれてほせや萩の花
とうたわれるが、さて「田植草紙」では次に「露にしよほねれたこがらす」の詠唱となる。

5 番

一あさおの小からすかつゆにしよほねれてな
 二うら／＼とないてとをるつゆにしよほねれてな
 三けさのけんそうけにうらやかなとのた

〔注〕
 〔1〕 あさお、不審の語。久保本、歌謡集成本ともに同じ。
 22番に「あさおのたねもて」とあり、「麻苧」がうたわれるが、この場合如何。諸本「あさ(又は朝) お(又はを)」(高松屋古本、雑紙、植哥、大哥双紙など)とあるのが多い。他に「今朝とう」「朝とう」「哥苧、ぞうこくや本、東石見など。とうは早くの意。」がある。朝歌のなかにあって、やはり朝の意に関係する語であろう。浅野建二氏は「朝乃至は早朝の意の方言と思われる」と述べられ、アサオリという方言が石川、富山地方で朝食前又は後の意であることをもってきておられる(『日本歌謡の研究』)。ただしアサオリであり、北陸地方の方言で決定的とはいえない。参考になるものに『山家鳥蟲歌』

の因幡の国のところにこの5番と同系で

『朝問あそまよりのこん鳥（一本小鳥）が露にしよぼぬれたようなゆう／＼とないてとをる露に濡れたよな

とあり、「あさま」の語は他に田植歌本でも「あさまのほどは」などと用いるし、今にいたるまで鳥根・山口地方に広くある朝の意の方言『島根県方言辞典』、山中六彦氏『山口県方言辞典』等。

「小からす」のところ、「こか（又はが）らす」（高松屋古本、植哥、哥写等）。また「こん鳥」とも（俚謡集、右引用の山家鳥蟲歌所載のものなど。前3番の「こうさぎ」と同音で続けたかとも思えるが、意味の上では神聖な鳥としての「神鳥かみち」がすてがたい。山県郡千代田から出た古体をしのばせる「古本田植歌集」のこの5番に近いものに

『今朝の御鳥権現様のおからす

今朝の権現げにうらやかな神たとあり、また

『春日の宮にこそ神鳥鳴くぞや（『山県郡史の研究』所収）

とうたわれるように、この一群の歌語でも「鳥」は「神の使」としてしばしばうたわれる（そういう信仰を古くさかのぼると、『塵袋』や『塵添ちりぞ囊抄』にも述べる如く太陽神信仰と関連するし、そのミサキとしての神性は各地に見聞できる）。神聖な鳥という点で特に注目されるものに、なかでも「巖嶋」のそれがある。

「控嶋」の

『小鳥が夜の明ぎわに立居は さもにぎやかにないて立ッ
ないて立ッ西でわ何処の嶋に行く 宮嶋様の島に行く
はそれをうたい、また加藤熊一郎氏著『日本風俗志』の下巻
に紹介せられた「宮嶋踊」（宮津地方盆踊歌）は

『養父崎見ればありがたや 供へおいたる桑をば 二つ連
れたる御鴉が さも嬉しげにかいはみて 弥山をさして飛
び行けば 願主舟子にいたるまで 諸願成就寿ぎて……

と「弥山」の「御鴉」がうたわれている。前記した如く2番の「みせん」は巖嶋のそれが注目されるようで、この「こがらす」もそれに連なるものであろうかという仮説をたてておきたい。そこで参照すべきものに『芸州巖嶋図絵』・巻三と四の弥山や養父崎神社の項がある。つまり弥山に鳴く雌雄一雙の神鴉を「こがらす」と言うことを伝えているのは参考になる（民俗芸能の面では、土佐の風流踊の神踊をこをどりと言っているのは周知である）。つまり意味の上で「こがらす」は神聖な鳥としての「神鳥かみち」であり、もう少し限定することがゆるされるならば、この場合は地理的にも近い巖嶋の弥山に鳴くそれであったのではないかと思う（拙稿「田植草紙系歌謡における呪術的背景」等にもふれた。なおこの「こがらす」の名は有名神社の小社にみられ、その一つ京都・下鴨ノ神社の内の「小鳥神社」としても見えている（『鬼芸泥赴』・巻五、『扶桑京華志』・巻の一、『山城名勝志』・巻十一、等参照。例えば後者「小鳥社、坐河合社廻廊内」とあり）。また『伊勢参宮名所図会』・

巻の三では八幡宮から垂水への記事の間に「小加良須御前社」が見られる。また稲荷の田中社の末社にも「小鳥社」があるという（近藤喜博氏『古代信仰研究』参照）。

「しよぼぬれて」はしっかりと濡れているさま。

〈2〉「うらうらと」は晴れやかな和やかなさま。次行では「うらやか」。例えば

〽うら／＼とさいた朝日に……（御哥雙紙）

その他用例前掲拙稿参照。

〈3〉「けんそう」は「見参」、まみえることであるが、ここではくだけて「見かけ」「ご様子」といったところか。「げんぞう」（大哥双紙）。「ぞうこくや本」では誤解して「源蔵」。

「icani niatori flaxu guenzoxenu」（文禄二年耶蘇会板『伊曾保物語』・雞と犬の事）

其他用例については浅野建二氏『日本歌謡の研究』・一〇六ページ参照。

最後の「た」は「だ」で断定の意の助動詞。他に46番・60番・63番・103番に用いられている。狭義の田植草紙系諸本で「とのんだ」（大哥双紙、植哥、ぞうこくや本）とも、「とのし（ぢや）」（高松屋古本）とも。ゆえにこの一群の歌謡では「ぢや」「だ」「んだ」が混合して用いられているのを知る。この「だ」の使用については吾郷寅之進氏の「田植草紙歌謡の成立時期」（日本学士院紀要、十八卷三号）のなかでふれられていて、歌謡史の上では一応「ぢや」↓「だ」へ進んだのであろう。

うとされ、閑吟集・宗安・隆達の小歌には「だ」はほとんど用いられていないのにくらべて、田植草紙では多く用いられており、これらの小歌集よりは後の用法を伝えるものかと述べられた。ついで山内洋一郎氏は方言という点に注目され、石見・出雲方面が「だ」「ぢや」並用地帯であることを述べられ、必ずしも両者で時代的な流れは考え難いことを指摘された（田植草紙のことは『田畑研究』3号）。

〔考説〕

このオロシが一声のみであるのはやや不自然である。事実、久保本には

〽あさおのこからすかつゆに志よほぬれてな

うら／＼とないてとをるつゆに志よほぬれてな

けさのけんそうけにうらやかなとのた

つゆに志よほぬれあけそのからすかつこえ

からすとりてやえしまたけかたおうだ

とあり、オロシは三声あり、他に例えば「高松屋古本」では

〽ねはたおしいニよあけのからすなまいそ

「金井坐本」では

〽寝はだおしひに夜明のからす鳴（下欠）

〽みてわ七いろ美事な殿のごさるに

などの声がついている。「雑紙」では

〽朝をの小からすかつゆにしよほぬれてな

うら／＼とないて立つゆにしよほぬれてな

けさもきゝたか夜明のからすかないたよ

鳥かうとうて夜ふかに殿をもといた

とある。これらから見て、おそらくはもう一・二声ほどのオロシのあるのが本来の形であると言えよう（友久武文氏「田植草紙歌謡の構造——オロシを中心としたノート」、中世文芸・18号所収、参照）。

そして、これらのオロシをながめてみると、「うらやかな殿」が「まだ寝肌惜しく思つて恋人の館から朝帰りする若者」であつたことがよりはっきりするのである。それが「あさおのこがらす」で歌い出されている点は、前4番の「奥山のこうさぎ」でうたい出されたことと同様の発想であらう。しかもこの歌は一方で「上大江子本」では

〽露にぬれハき京山

〽森にこからす鳴のは山すこいそ

〽いまハこからすき京のそらヲまいヲる

などの声もち、「双紙」では

〽けさとふる小がらすハつゆにしよぼぬれての

うら／＼とないて通るつゆにしよぼぬれての

つゆにぬれてハけさ夜のからす啼きおる

露にぬれてハききやうの山ニまいよる

もふておとさじききやうのそらの露をバ

ききやうなびけやなびかざ風にもまりふぞ

とうたっているのであり、前の3番とも一連の零屈気をたもっていることがわかる。露に濡れた「こがらす」はしおらしい桔梗に

ほのめかされた恋人と細い契りを結んだ若者であつたと言えるのであり、その契りの零屈気は朝歌一番からしつとりと情味をもつて歌いつがれているのである。

鳥は早朝森を飛び立って鳴く。「将曙之時群飛陳鳴」（『和漢三才図会』）というこの鳥は和歌にも朝鳥としてうたわれ（例えば『綺語抄』参照）、元旦の風物としてもめでられ、歳時記には初鳥となり、屏風絵ともなつて周知である（柳田国男翁『野鳥雜記』参照）。親歌と子歌はそのさま——特に民俗信仰の背景をもつ神聖な「こがらす」が朝に鳴きわたるさまがうたわれている。村の（あるいは巖島弥山の）朝の自然である。そしてオロシでは、その鳥が朝露に濡れて朝帰りする若者——4番にあった「絲より細い契り」を結んで帰る殿におきかえられてゆくのである。これは4番と同じ運びであることは言うまでもない。こういった歌の流れを見るとき、やはりそこに「文芸としての動き」のみごとさを認めざるを得ない。この点は以下、多くの歌に指摘できよう。ただしこの田植儀礼の場の歌としてはその「文芸としてのみごとさ」のみが目的であつたとも言えないようである。つまり恋する殿御をうらやかと表現する心の浮き立ちは花田植の場で歓迎されるべきであつた。はなやかさは呪術律の一つとして効果がある。「こがらす」であれ「殿」であれ、「うら／＼と露に濡れている状態」（諸本見渡すとさんはいも早乙女も露に濡れて登場するさまがうたわれる）も注目される。この歌の情景はもちろん、露に濡れたわびしさ、はかなさをうたうものではないのである。そこで「濡れること」のもう一つ

の意味、及び「露」なるものの呪術的な意味を統いて述べねばならないが、かつて拙稿にあらあらふれたので（前掲論文、紙数の都合上ここには省略する）。

6番

「一朝きりにさしこめられてさおしか、
 ① ② ゆくかたのふてはわかをよむ

③ さしやこめられ小うたもわかもよまれぬ

④ しかのはらけをぬいてハ筆にいわれた

⑤ 筆いゆふてはみなほけきやうをかくれた

〔注〕①「高松屋古本」「口伝之鑑」などでは「ゆり」の片

書きをもつ。さおしかは諸本「さもしか」とするもの多し。

石見地方でも男鹿のことをさもしか（『島根方言辞典』）

② 和歌を読むのところ「歌を読む」（上大江千本、「空を見

る」（比婆郡田植歌）とも。

③ 後半、小歌も和歌も読まれぬ。「横路本」では

「うたをよまれてへんかをなにとよもうか

の声もつける。「田植草紙」では他に32番で

「われがとのこわ小歌もわかも上手よ

とあり「和歌」と「小歌」がともにならべられる。その他前

掲した「高松屋古本」・朝歌一番では

「うたやわかやよみてさらにねらればやな

がある。ゆえにこの「うた」は「小歌」とほぼ同じ用法であ

ろうし、「小歌」の語も私は広く見て当時の歌謡（中世小歌や田植草紙系歌謡も含めて）を意味するのであろうと思う。すると「よむ」が注目される。このことについては「田唄研究」

10号、所収の高松屋古本、朝歌一番の輪講で述べたが簡単にもう一度みておくと「小うたもわかもよまれぬ」「うたやわかやよみて」とあるのであら、
 「よむ」は「和歌」の語だけを受けるのではなからう。つまり「小歌」「歌謡」をも「読む」と言っている。よりはっきりしているものに
 「うたをよみてまたうやとのくるまで（高松屋古本）
 「哥をよんではまとうやとのくるまで（植哥）

ともある。「うた」——「歌謡」——口誦の歌をも「よむ」と言う。これは古く『日本書紀』・神武前紀戊午の年の秋の項で、天皇が弟猾の設けた饗宴の席で「宇陀の高城に鳴鶴張る……」の歌をうたつたとあり、そこに注して「謡、此云ニ

宇多預瀨」とあることと照し合わせることができであらう。この「ウタヨミ」はこれまで知られた口承文芸の歌謡をよむというたしかな唯一の用例なのであったが、私はこの「田植草紙」系歌謡の場合も、そういう伝統をかすかに伝えている例として注目されるものだと思う（歌詞における古代歌謡と田植草紙系歌謡との関連はかつて二・三指摘したことがある）。

「田植草紙の解釈——111番112番113番の背景——」（『田唄研究』・9号所収、参照）。古代における「歌をよむ」ということに

ついては土橋寛氏「歌をヨムということ」（『ハハキギ』・昭和

36年10月号)に詳しいが、要するに「よむ」は讀め歌・祝い歌について用いられる語で、祝い歌などをうたうことで、ヨミウタは祝い歌の義であるようである(「よむ」は実際には今の朗読の如く単調なうたい方であつたろうと推量されている)。なお注意すべきことに、『巷語篇』が載せる幡多郡楠山村の田植歌があつて、これでは歌を「よみ歌」と「うたひ歌」に区別している。はつきりしたことはわからないが、おそらく、折り目にくる儀礼的なヤク歌を「よみ歌」と言つたのであらうと想像する。つまり古くは古代の「歌謡をよむ」といった言い習わしのなごりが田植祭りの呪術的色彩をとどめている歌謡——一種の祝い歌でもある——のなかにみとめられるということである。ただ変化したことは「うた」なるものの内容が中世後期の小歌を中心とする当世風の歌謡を指すようになったことである。そしてハレの場ではたとえ恋の小歌であらうともそれが呪歌としての意味のある歌謡になつてゆくことはしばしば述べてきたとおりである。

〈4〉 はらけ、腹毛のこと。「鹿の白毛をぬいては筆にゆはれた」(『山県郡史の研究』所載歌)とも。筆には「今多所用鹿毛也。有白赤二種」(和漢三才図会)。

〈5〉 筆に結うてはみな法華經を書かれた。

〔考説〕

この歌のオロシの部分はずでに志田延義氏のご指摘ある如く(『日本歌謡圖史』・田植草紙の項、及び日本古典文学大系頭註、「万葉

集・卷十六・乞食者詠の「鹿の為に痛を述べて作れる歌」に「わが毛らは御筆はやし」を古いところとし、『梁塵秘抄』・雑法文歌の「峯に起き臥す鹿だにも、仏になることいとやすし、己れが上毛を整へ筆に結び、一乗妙法書いたんなる功德に」がひじように近い形を伝えていることによつても、「鹿(又はその毛)」が人間に役立ち奉仕するという発想の歌謡の一片であることがわかる。このへんには「鹿」と農耕儀礼との關係を中心に述べねばならぬことが多いが、同じく鹿をうたう27番を中心として別に拙稿をしたための予定であるので農耕呪術における鹿の存在についてはこゝには省略する。

さて、鹿の毛で筆を結びそれで恋の文を書くという近世民謡の類型もあつて、

〱十七がふみかくふでのうらのけわ

こいしかやまのしかのけよ(小笠原近重流本)

〱十七が文書く筆は何筆か

秋鳴く鹿の巻筆よ(岡山・赤木本)

右は田植歌としてうたわれたものであるが、他にも

〱紅葉踏む鹿憎ひと云へど

恋の文書く筆となる(山家鳥蟲歌・和泉)

〱奈良の春日のお使者の鹿は

鹿の白い毛が筆となる(灘酒造歌・米谷利夫氏篇『酒造り歌』所載)

などの例をたどることができるのである。ただ「田植草紙」の場

合、鹿の毛が恋の文書くために役立つとうたうのではなく、それが法華經写経に役立つとうたっているのであって、どちらかというところ『梁塵秘抄』の雰囲氣に近いことがわかる。右の近世民謡と比較するとやはり中世的とても言おうか。

そして田植草紙系歌謡では、ここに法華經書写がうたわれるように、又その程度に、仏家又はそれにまつわる伝承者からの影響がみられる。農耕儀礼に関連するごく一般的な断片的な俗信としての傾向であるかもしれないが、「さんばい」を中心とする古来の神道の色彩とともに、こういった仏教的な面も注目される。

『田植瑞穂の玉苗』（文化十三年に安芸山県郡岡本氏建雄という人が著わした一種の由来書。国学院大学日本文化研究所紀要七輯に郷田洋文氏翻刻）には

「吾家に田植由来記といふ書を持伝て秘書とするものあり これを見るにさのみふるき書にはあらず 殊に法師のつくれる書にて其の書たることいなしこめ仏のことも多く取るにたらずる書なり

などと記し、又

「由来記曰、田植歌は伝教大師の作り給ふ処なりとするせとも、今世にうたふ歌大師の作とおもはるゝはいまたきかず

と言う、「田植草紙」は伝教大師が作り給うたという言い伝えは『文政十一年書写田植由来記』や『塚本理右エ門用田うゑ哥乃由来の事』にも見られるものでこの「田植草紙」二〇番でも「伝教大師」がうたわれている。つまりこのように仏教的伝承・語りく

さが田植草紙の背景にあったことだけを述べておきたい。

さらに右にあげた『塚本理右エ門用田うゑ哥乃由来の事』には次の如くある。

一 三社といふは大神宮といえり、又仏説にわあみだぶつともいえり……

一 三社をりになゑを三ばづふたところにおいてハまづ三光三さいなり 仏にてハ六地藏ともいえり……

これらはむしろ近世の形式的な仏教的俗説であるかもしれないけれども、つねに、神道的な面と対照させて載せているのはおもしろいことである。田植儀礼の場には、この二つの流れが交叉し雑然として、田植呪術の深い流れに関連もしているようである。今後、田植草紙の伝承者達言いかえると作者達・管理者達の実体といった面で参考にされるべき事柄であろう。写経を勧めてあるいた聖達も思われる。

野の兎や烏がうたわれ、やがて朝霧に見えかくれる鹿の歌が次にも続く。

7 番

「1」

「一かいたのおきにこそしかやふし候よ

「2」

「こひする鹿はふとふなひて候よ

「3」

「こんよとなくはしかの子

「4」

「子てハないもの三こへとなくハしかのおう

「5」

鹿のはつこへまへにわかわけのなるをと

〔注〕へ1 前半、掻い田の澳にこそ。澳はずと遠く開けたところ。向うの方。「さき」（大哥双紙、哥写）とも。また「沖

の田中」の語もしばしば用いられる（上大江子本、其の他諸地方田植歌）

〔2〕ふとふ（太う）のところ「高う」（哥写、大哥双紙など）、「三声」（ぞうこくや本）なども。

〔3〕同じく「こんよとなくは」（高松屋古本、上ミ田屋本、植哥）の他、「くんよとないた」（哥写、大哥双紙、横路本、「りんよと鳴くは」（古本田植歌）など。前の子歌から次のオロシにかけてこの音でリズムがある。この類型は踊歌にも

へうはがいのこづまさきには

秋鹿がこいよとないたる所（巷謡篇・土佐をどり・かごしま）

へ上へりのりんの裾には秋鹿が妻恋こがれてこいよと鳴たる所を……（阿波國神踊歌本・伯母御踊）

へ上へるのりんの裾にわ

秋鹿が妻恋こがれてこんよと鳴いたる処を

振踊は一トおどり（神踊歌本・惟子踊）『日本歌謡研究』・第二号所載

を見る。

古く和歌では「古今和歌六帖」・第二帖の鹿の歌

へ春の野の繁き草葉の妻恋になぞ我恋のかひよとぞ鳴く

（さだぶ）

へ秋山に妻なき鹿の年をへてなぞや生きてのかひよとぞ鳴

（伊勢）

へ濡衣を干すさを鹿の声きけばいつかひよとぞ鳴渡りける

（友則）

がある。

〔4〕このオロシ諸本次の如し

へ子てハないもの三こえとなくハしかのをう（高松屋古本）

へみこゑ子がなくよこゑとなくハしかの王（ぞうこくや本）

へ子てハないもの三声となくハ鹿の王（上ミ田屋本）

へ三こゑこゑ半四こゑとなくハ鹿の王（有久本）

「おう」のところ歌謡集成本「王」とする。「王」の意に解釈してうたっていたようである。志田延義氏「雄（をん）か、王（わう）か」（大系頭註）

王（わう）か」（大系頭註）

〔5〕鹿の初声前には川瀬の鳴る音。向うの搔田では鹿が鳴き、

前を流れる川瀬はどんとと鳴っているさま。繁栄に満ちた予祝的雰囲気をつたっている。

〔考説〕

明治のころでも田植草紙系歌謡地帯では「鹿符」がさかんであり、野山を鹿がかけめぐっていたという（田中梅治氏著『粒々辛苦・汗一滴』参照）。代掻きのすんだ田の向うの一群の鹿が田植の場から視界に入るのであろう。6番ではこの鹿を「和歌をよむ鹿」という風にうたったが、7番にも続いて「恋する鹿」とうたわれている。オロシでは呪術的心意で把握されていた鹿の雰囲気がつたっている。すなわち最後のオロシでは田植儀礼の場においてよろこ

ぶべき吉祥をうたつてしめくくっている。原野をかける鹿やその初声と川瀬の鳴る音は儀礼の場の原始的心性を刺激した。つまり、後に述べる27番のオロシに

「か」といてにうれしやしかのほつこゑ

とあり、又雑紙で前の6番に相当する歌の最後のオロシでは

「年ノはしめにうれしやしかノ初こゑ

とうたつていところからしても、まず鹿やその(初)声に対しては特別な意味を感じとつていたことがわかる。このことは古代から近代に到るまでの農耕予祝儀礼における鹿の民俗を通覧することによってよりはつきりするのである。これに類似する觀念は例えば他に

「きこうやめでたいとりのこゑおば(24番)

の形にも見られている。右の「鳥」もここにうたわれた「鹿」もともに和歌にうたわれるがごとき美的なる詠歌の対象であるのみならず、その存在の深く長い伝統において、その声がめでたいもの、それを聞いて農の人がやがてうれしくなる意味があったことは確かであろう。以前拙稿でもふれたが、その他「田植草紙」の各歌の素材についてはつねにその意味のいくつかの重なりを見ておく必要があるように思える。「恋に鳴く鹿」は「稲を予祝する鹿」でもある。また一方、日頃の農の生活ではむしろ田を荒し農民を苦しめる鹿も(前掲「粒々辛苦・流汗一滴」三五ページ参照)このハレの田植祭りにおいては、長い原始的心性においてとらえられた鹿の伝統——その血が稲に靈力を与え、農耕を予祝し、しかも田の

神・山の神の使でもある——が意識されているのである。

また川瀬の鳴る音もよく民謡にはうたわれるが、なかでも『徳川実紀』『延享五年小歌しやうが集』『鄙廼一曲』などに見られる。

「お台所と川の瀬はいつもどんどど鳴るがよい(後者の津摺曰唄)また神奈川県三浦郡、田植歌では

「おだいどころとかわけのみづはいつもどつととなるがよいとある。

そのとうとうと流れる音が豊かな活気を感じさせ、繁栄を象徴しているようにうけとられたことがわかる。

こういうところからしても、このオロシの「鹿の初声」と「川瀬の音」はやはり単なる情景の描写に終るものではない。このオロシにはハレの日の吉祥が二つならべられているのである。

挿田の渙の春鹿を恋する鹿として一篇の歌にまとめてゆく文芸的手法のおもしろさがあるとともに、農の人と鹿の原始的なつながりがそれでもかすかにうかがわれるのである。

補記

本稿で引用した各田植歌本の略称(カッコ内)と御翻刻者名を記す。前回補記したものは省略する。

○吉川子爵家蔵本写本玖珂郡志所収玖可組田植歌(玖可組田植歌)――
以上牛尾三千夫氏翻刻。○上佐屋本田植歌草紙(上佐屋本)――
以上小島憲之氏翻刻。○慶応四年書写せうくや市右衛門作本田植哥(せうくや本)、新庄横路一二氏蔵田植草紙(横路本)――
以上久枝秀夫氏翻刻。○田植歌控帳(控帳)――
以上湯之上早苗氏翻刻。